

古代鎌倉の卜骨と三浦半島

—律令期における海浜部集落の一側面—

押 木 弘 己

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1. はじめに | 5. 出土遺跡の様相と特質 |
| 2. 神澤氏の形式分類と近年の研究動向 | —漁撈・ト占に見る伝統性— |
| 3. 由比ヶ浜出土の卜骨 | 6. おわりに—ト骨をめぐる諸問題— |
| 4. 三浦半島の事例 | |

1. はじめに

筆者は先に、近年鎌倉市由比ヶ浜地区での出土・報告例が続いている古代の卜骨について、研究に蓄積のある三浦半島の類例を参照しながら比較・検討を行い、併せて律令期由比ヶ浜における集落形成の動態、また卜骨がそこに持つ意義について言及したことがある（押木2004）。そこでは、先行研究の経過・方向性を再確認するとともに、その過程において生じた幾つかの視点をもとに、以下の要点で試論を示した。

- a. 三浦半島では、弥生時代中期まで骨ト（獣骨を用いたト占）の伝統が遡ることが確認されているが、鎌倉の卜骨も、地勢・出土資料に見る同地域との親縁性の深さから、この伝統の一環に位置付けられるものといえる。
- b. 鎌倉の卜骨は、出土遺跡の立地や供伴遺物、また三浦半島での研究動向から見て、海上・海辺での生業活動に従事する漁撈民らの習俗遺物であった可能性が高い。
- c. 由比ヶ浜の集落は、律令国家の確立期において地域の拠点集落として設営されたもので、この中に骨トを伝統習俗に持つ在地集団が、国家の介在下に取り込まれて形成されたのではない。

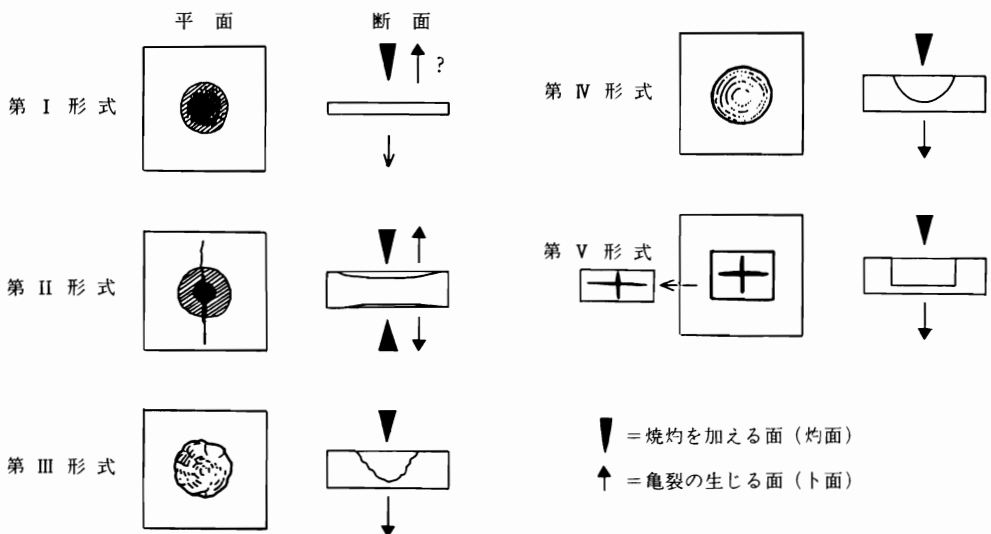
といったところであるが、いずれも具体的な論議には踏み込まず、印象的な問題提起を示すに留まった。そこで本稿では、上記の論点に則して幾つかの事例検討を加え、鎌倉の卜骨から何が見出せるのか、改めて考えることにしたい。

2. 神澤氏の形式分類と近年の研究動向

1949年の三浦市間口A洞窟での発見以来、三浦半島は卜骨研究において常に一先端を担ってきた地域である。その経過については前稿でも述べているため、ここでは細かく触れないが、ほぼ定説となっている神澤勇一氏の形式分類および近年の研究動向についてのみ概観しておく。

神澤氏は、自身が担当した三浦市間口A洞窟の再調査⁽¹⁾において、弥生後期のト骨と全国的にも初例となる古墳後期のト甲（占いに用いた亀甲：ここではアカウミガメ腹甲製）を発見し、これを契機としてト骨・ト甲の資料集成を全国規模で進めた。その上で、整形・焼灼技法に基づく形式分類を試み、地域的偏差は認められるとしながらも、形式差に基づく時代差・変遷を提示した（第1図）。三浦半島に関わる形式のみを挙げれば、第Ⅱ形式および第Ⅴ形式の類例が出土していることになり、前者では骨材への整形を殆ど施さない弥生時代の様相と、切削を加えた後に焼灼を加える古墳時代の様相とが把握されている（後節4参照）。第Ⅴ形式は、骨材へ切削・研磨を施した後、方形ないしは長方形の鑽と呼ばれる彫り込みを切り、この底面に「+」「-」といった直線形の焼灼を加えるものである。本形式では、間口のト甲例が古墳時代後期・6世紀後半頃の所産とされ最も古く、これ以降、奈良・平安時代に至る資料は全てこの形式に属するものとなる。第Ⅱ形式では灼面の裏面に亀裂が見られないのに対し、第Ⅴ形式では彫鑽と加熱によって意図的に亀裂、若しくは変色を発生させて占う方法が取られていることから、氏は前者を「焼灼面・ト占面一致型」、後者を「焼灼面・ト占面分離型」と呼んで上記5形式の上位に設定している。⁽²⁾ また、今のところ当地域における出土例はないものの、円形鑽を設ける第Ⅲ・Ⅳ形式（彫鑽の粗・精により類別）が第Ⅴ形式に先行する形態となる可能性も指摘され、こうした所見も全国での類例増加とともに、逐次裏付けられつつある（神澤1976・1983・1987・1990）。

1990年代の後半以降は中村勉氏によって、三浦半島という地域性を重視した多角的視点から考察が加えられている。一例を挙げれば、律令体制の確立期前後を境に、ト骨用材がシカ・イノシシの肩胛骨といった狩猟獣骨から、ウマ・ウシ肋骨といった家畜獣骨に変移する点に留意し、当時の生産体系に転換のあったことを暗に示唆する一方、これに伴う可用骨材の増加から、ト占自体にも形態・内容面で弥生時代以来の伝統からの変容があった可能性を指摘している。



第1図 焼灼形式模式図（神澤1990から転載）

中村氏は一方で、従来説である漁撈民と骨トとの関わりにもやはり重要性を認め、弥生時代のト骨が海蝕洞窟に偏在して出土する点、また古代の海浜部遺跡における漁具・魚骨などの伴出事例をもとに、三浦半島における骨ト祭祀は、漁撈・採貝といった海上・海辺での生業に従事する海人の伝統的習俗であったろうとする考えを改めて示した。さらに、骨トに見るこのような伝統性は、伊豆や房総半島といった他地域との海を背景にした広域的ネットワークの中で培われたのであろうとする視点も示している⁽³⁾（中村1996・2002、中村他1998）。

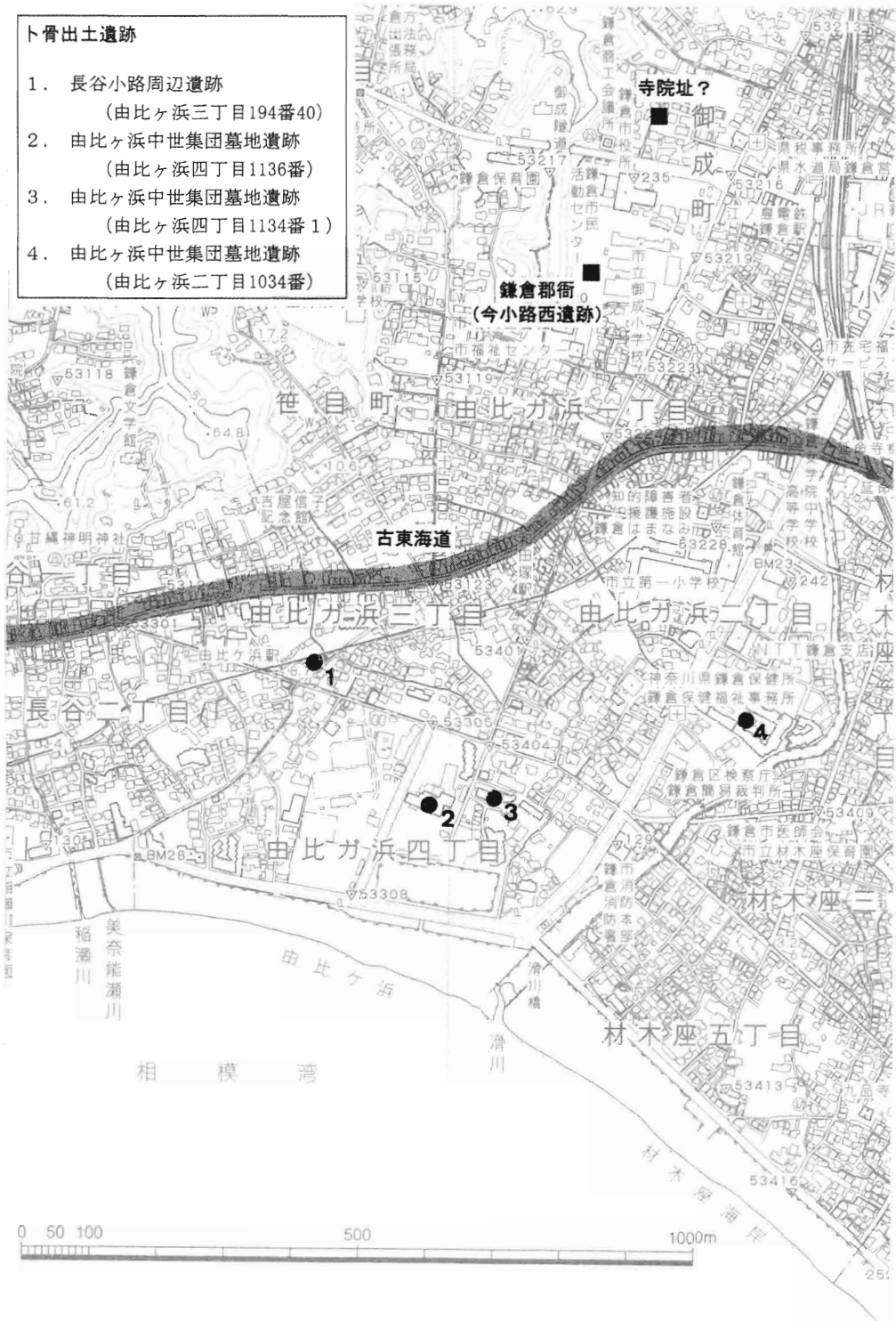
鎌倉では、1980年代における発掘件数の増加に伴い、由比ヶ浜地区において古代集落の発見が相次いだ。それと比例するようにト骨出土例も確実に増加していった。1990年代後半にはそれらの調査報告がまとめられ、この中で大河内勉氏は、遺跡の立地性や出土遺物から海浜部における生業活動に言及し、由比ヶ浜の集落を「半農半漁」と性格付けたが、その上で従来の視点から漁撈従事者とト骨との関係を認知し、豊漁や航海の安全を対象にト占祭祀が行われたのだらうと解釈した。その一方で、伴出した「神主」銘の墨書須恵器などとの関わりからト占を主宰した人物像にも言及し、鎌倉郡内に所謂「式内社」が鎮座しない点も考慮し、集落内の長老らがト占を取り仕切ったのだらうとする推論を述べている（大河内1990・1996、大河内・菊川1997）。

以上のように、鎌倉・三浦半島におけるト骨研究は、海上・海辺における生業との関わりの中で理解する向きが主流であったといえ、このことは冒頭で述べたように、本論の主要論点ともなっている。

3. 由比ヶ浜出土のト骨

（1）遺跡の概要

鎌倉市内では、現在までに長谷小路周辺遺跡と由比ヶ浜中世集団墓地遺跡の2遺跡4地点でト骨の出土が報告されている⁽⁴⁾（第2図）。いずれも滑川右岸の河口部付近⁽⁵⁾に形成された海岸砂丘（由比ヶ浜）に立地する遺跡で、地点によって様相に多少の違いは見られるが、一体の遺跡群として捉えることが可能である。この砂丘域に集落が営まれるのは、律令体制の確立期に当たる7世紀後葉頃になってからで、それ以前は生活空間としての痕跡は見取れず、葬地や祭祀場としての様相が僅かに確認されているに過ぎない。菊川英政氏の分析によると、集落の出現段階となる7世紀後葉から8世紀初頭にかけて遺構数の急激な増加が見られ、その後、8世紀前半代には比較的落ち着いた遺構の展開を示すという。一方で、当段階における増減の動きが郡衙（今小路西遺跡・御成小学校地点）周辺域に先んじて進行することにも触れ、郡衙などの造営に係る第一段階として、工人らの集団的移住があった可能性が指摘されている（菊川1997）。これ以降、9世紀前半代までは比較的密な遺構の展開状況が続くが、次第に遺構件数も減少傾向を示しつつ、10世紀中葉頃を最後に集落は姿を消す。ト骨の出土も、こうした集



第1表 鎌倉における卜骨の消長

地点 番号	遺 跡 名	7 世紀	8 世紀		9 世紀			10世紀
		後様	前葉	中葉	後様	前葉	中葉	後様
1	長谷小路周辺							
2	由比ヶ浜中世集団墓地		=====	=====				
3	由比ヶ浜中世集団墓地		=====	=====	=====	=====	=====	
4	由比ヶ浜中世集団墓地		=====	=====	=====	=====	=====	

実線は10点未満、二重実線は10点以上を表す。破線は報文から卜骨の存在が想定されることを示す。

落の存続期間を通じて継続的に認めることができる⁽⁶⁾（第1表）。

出土遺物の様相としては、土器類では集落開始期から相模中央部における土器変遷の流れを汲む一方、7世紀末から8世紀前半にかけて盤状坏の出土が一定量ある点、また相模の他地域に若干先行する形で甲斐型坏の搬入が認められる点などが特筆される。さらに、三浦半島全域において9世紀代から10世紀前半にかけて盛行する「三浦型甕」が、当地域においても出現・展開する状況などは、鎌倉と三浦半島との親縁性を窺う上で看過できない事象といえる。その他の遺物には、腰帯具の鉈尾や多量の瓦など、官衙・寺院的色彩を帯びたものに加え、鎌や鋤先・穂摘み具といった鉄製農具が少量認められ、また釣針・土錘を中心とした漁撈具も一定量の出土があり、集落の多様な側面を見て取ることができる。

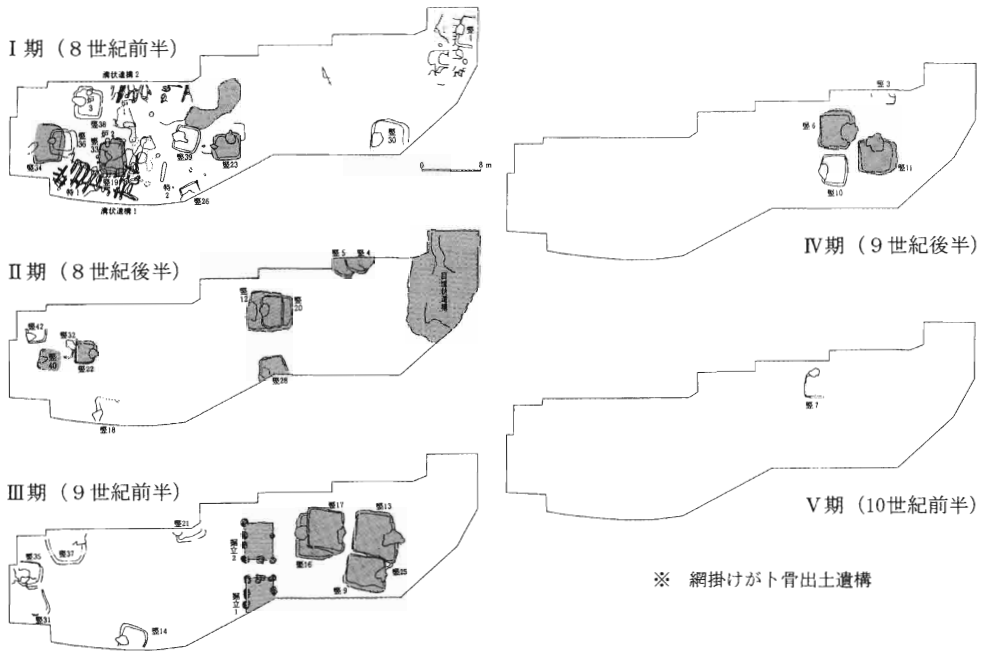
以下、前稿と記載が重複するが、由比ヶ浜出土の卜骨について地点ごとに成果概要を述べ、次いでその形態・特徴を見て行くことにしたい。

（2）出土状況

地点1：堅穴住居址4軒と土坑1基が検出。9世紀前半から中頃に時期的な中心を置く。卜骨は、9世紀中頃の2号住居址竈内より出土した1点が図示され、他に遺物包含層（8～9世紀の遺物が主体）からの出土も記述されている。

地点2：住居址が11軒の他、堅穴状遺構、貝塚状遺構、屋外炉、焼砂址、炭層、祭祀遺構、廃棄遺構などが検出した。集落の存続期間は7世紀後半～10世紀前半と考えられ、8世紀前半に形成のピークが認められる。卜骨は鑽を確認しえた69点が図示されているが、住居址からの出土はなく、貝塚状遺構や炭層・廃棄遺構に投棄されたものが大半を占めている。年代的には8世紀前半に集中する傾向が見て取れ、後段の地点3と比べて時期的なまとまりが窺える。

地点3：古代の遺構は住居址42軒と掘立柱建物址2棟の他、貝塚状遺構、屋外炉、焼砂址、炭層や祭祀跡と考えられる特殊遺構などが検出し、遺跡内でも最も密集した遺構展開を見せている。出土遺物も豊富で、土器様相により8世紀前半から10世紀前半にかけて、5時期に亘る集落変遷が明らかとされた（第3図）。卜骨は整形や鑽灼の曖昧なもの、未製品を含む151点が報告されている。住居址覆土や貝塚状遺構、炭層から多く検出し、使用後は他の残滓とともに



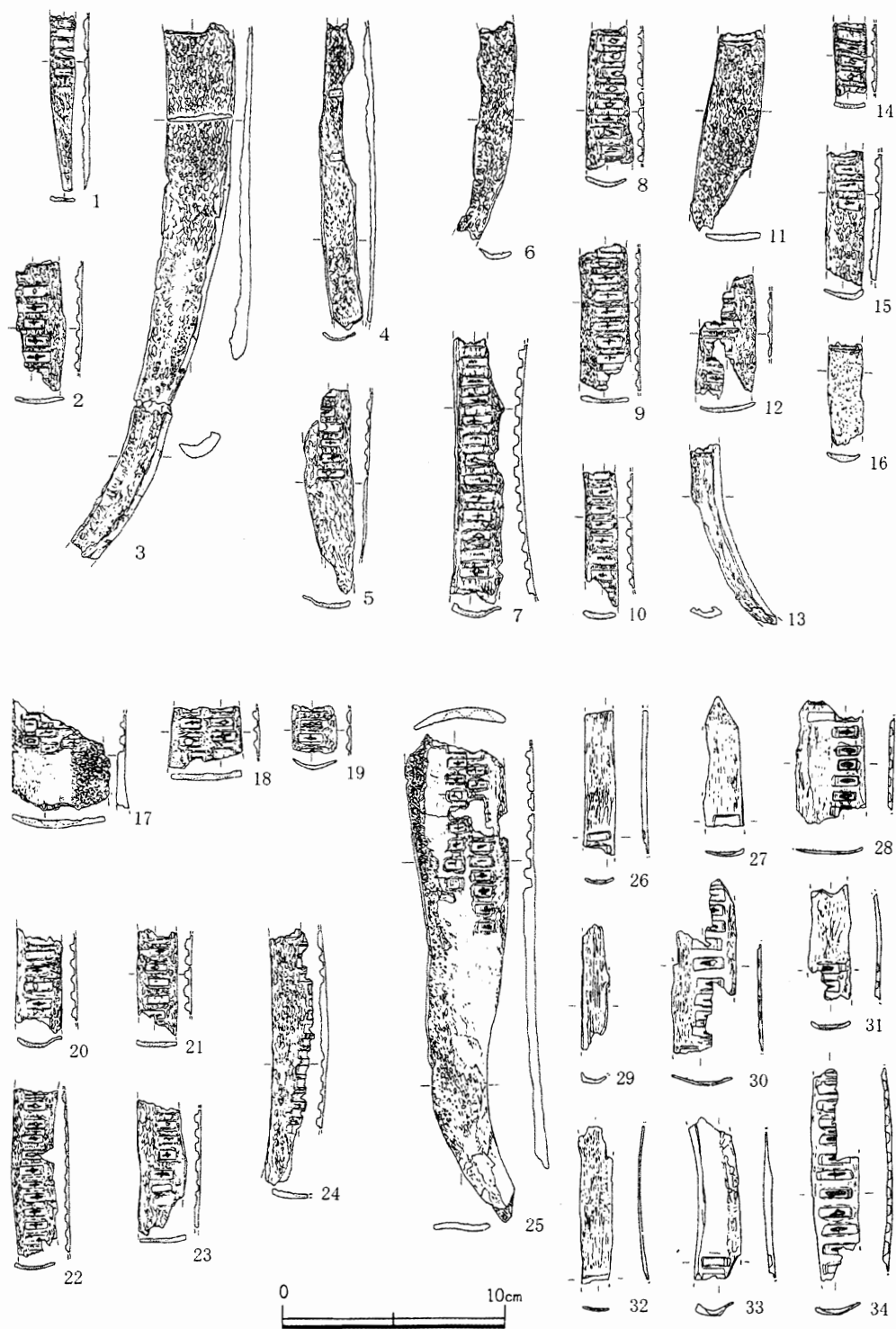
第3図 古代遺構の変遷・ト骨分布（地点3：大河内1996を改変）

廃棄された傾向が強い。年代的には8世紀前半から9世紀前半に集中している。本地点では、鎌倉で唯一となる肩胛骨使用例があり、周辺の同一層上では祭祀関連と思しき特殊遺構が発見されるなど、特筆すべき出土状況も確認された。この資料については、特殊遺構からの出土土器をもとに8世紀前葉の年代観が付与されている。

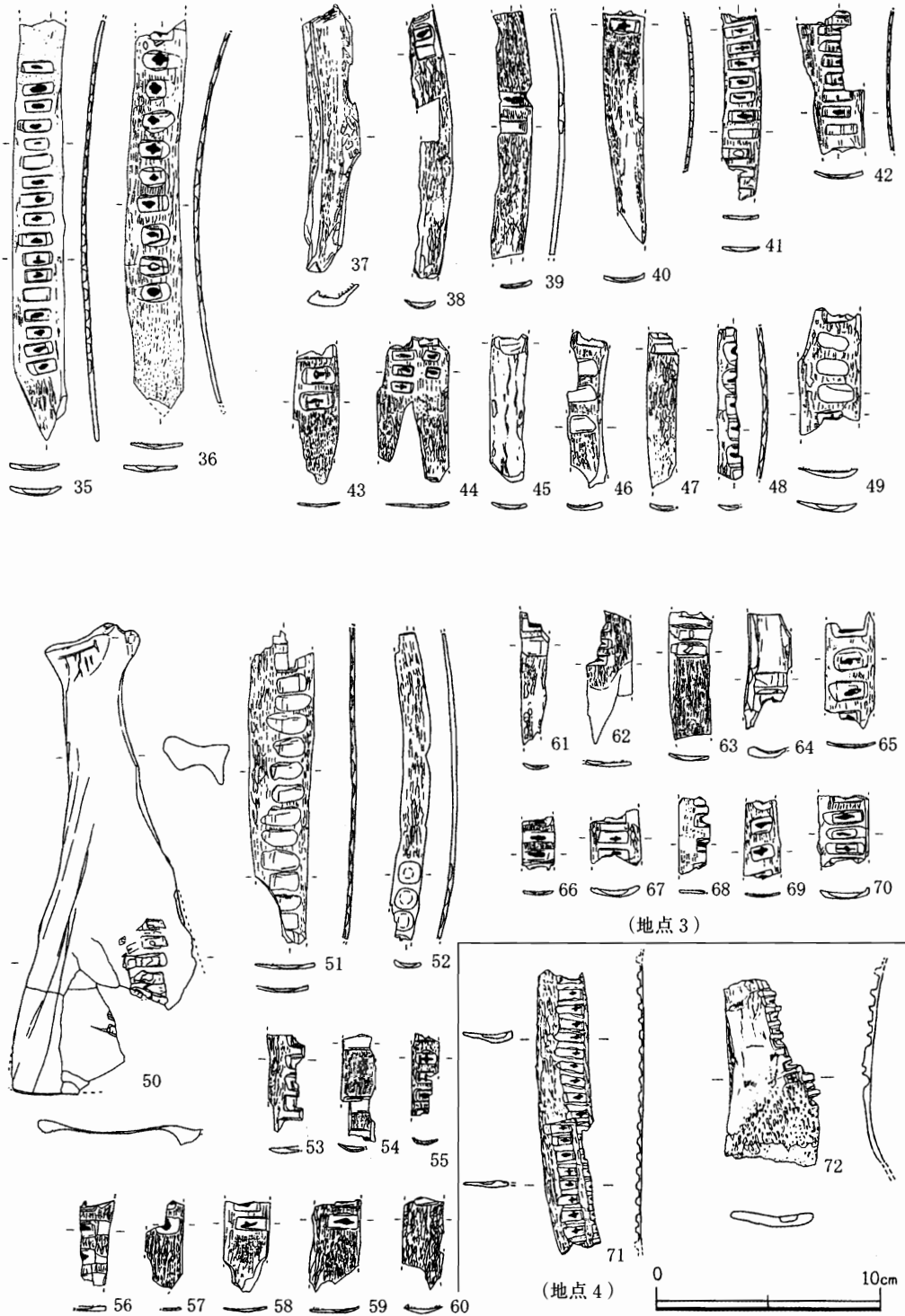
地点4：古代の遺構としては溝状の平面プランを有する祭祀遺構、土坑などが検出している。祭祀遺構は7世紀中葉、土坑には10世紀後葉頃の年代観が与えられている。ト骨は古代の遺構確認面から5点が出土したとのことで、うち2点が図示されている。報告では確実な年代観は不明としながらも、周辺出土遺物から、7世紀後半～8世紀代とする考えが示されている。

（3）形態・特徴

次に、出土したト骨の特徴について見ていくことにする。第6・7図には地点ごとに鑽灼の明瞭な資料を掲げたが、全てにおいて完形といえるものではなく、細かく破損したものが大半であった。これが神澤氏の指摘するような人為的破碎⁽⁷⁾の結果と見なせるかは不明であるが、少なくとも、前述の貝塚状遺構などを中心とする出土状況を見る限りでは、ト占後の埋納といった意識が働いたとは想定しがたい。人為的・意図的破碎の有無は別儀として、ト骨自体が非常に薄く作られる点と、故意に亀裂を生成させる祭具としての属性を考えれば、細片化という結果はやむを得ないことであろう。一方、こうした細片化は資料の実数を捉えにくくしており、由比ヶ浜における出土総数が200点を超え多数に上るとはいえ、実際にどの程度の頻度でト占が行われたのか、また一度のト占に伴うト骨の使用数はどれ位であったのかなど、明確に



第4図 鎌倉出土のト骨（地点2）



第5図 鎌倉出土のト骨 (地点3・4)

しない一因となっている。

これらのト骨は、いずれも神澤分類の第Ⅴ形式、「焼灼面・ト占面分離型」に属し、獣種は未鑑定ながら肋骨など細身の管状骨を用いた例が大半を占める。骨材は半載された後、海綿体を切除して平滑に均されているが、これは骨材全体に及ぶものではなく、鑽を成形する周囲に限られている。第5図35は鑽を設けない図の上方部にも除去が及んでいることから、ここに親指を添えるなどして焼灼されたとも考えられる。全体の厚さは2mm前後に削られ、側縁部は面取りされる。次いで幅4mm・長さ6～7mm前後の長方形鑽が一行ないし二列彫り込まれるが、鑽底厚は0.2mm前後と極めて薄く作られており、製作には熟練した技術を要したことが推測される。ただし、出土資料には焼灼痕を持たずに破損している個体も散見されることから、製作途中の失敗品も多少あったことは推察できよう。一例のみとなる肩胛骨（50）も、骨材の下半側縁部と下端を削って面取りを施しているが、肩胛棘の切除には至らず、この点では古墳前期の類例における調整方法と差異がある（後節4参照）。

大河内氏は鑽の形状に関して、古相では明瞭な角を有する長方形から、新しい段階になると隅丸状へと変化する傾向を指摘しており、9世紀前半の51・52などがこれに該当する。これらの資料を実見したところ、まず鑽の長さ・幅が一定でないことが一目で判別しえた。鑽は骨材の短軸方向に鑿状工具を当てて成形するが、これを2～3回に分けて行うため、長辺側の壁面に細い筋が入るのが通常である。両者はこの壁が面をなさずに階段状を呈しており、短辺側の壁面でも刃の入れと止めの位置が安定せず、結果的に鑽の大きさ・形状が区々となっている。1mm内外の誤差のため実測図、ましてや報告書掲載図には反映されづらい部分であるが、こうした細部の状況から作り手の意識の退化・粗雑化を読み取ることができるかもしれない。

ト骨は土器類との供伴性・一括性に乏しい遺物であり⁽⁸⁾、また今の段階では年代ごとに相対化しうるだけの資料数を得ていないため断定はできないが、それでも、大よその傾向として如上の時期的変化を窺うことが可能である。また、次節で紹介する間口洞窟出土の古墳後期のト甲と比べると、鑽の長幅比という点でト甲が6：4前後であるのに対し、由比ヶ浜のト骨は平均で7：3と横長傾向にあることが認められ⁽⁹⁾、古墳後期の類例が僅かなため推測の域を出ないが、こうした要素もト骨・ト甲の時期差を推し測る材料として設定できるかもしれない。

4. 三浦半島出土のト骨・ト甲

次に、三浦半島地域におけるト骨出土例を見て行くことにする。第6図には出土遺跡の分布を示したが、一見して海岸近くの遺跡に偏りがあることが分かり、弥生時代の事例については、中村氏の指摘にあるように海蝕洞窟に非常に強い偏在性を認めることができる。こうした分布上の特性は房総半島南部でも共通する一面というが、こと三浦半島においては、遺跡数の多さもあって一段と際立ったあり方を示している。第2表には、遺跡・地点ごとの出土状況を

まとめたが、ここで特徴的な遺跡について数例をピックアップし、当地域におけるト骨（ト甲）の時代別様相を見ることにしたい。

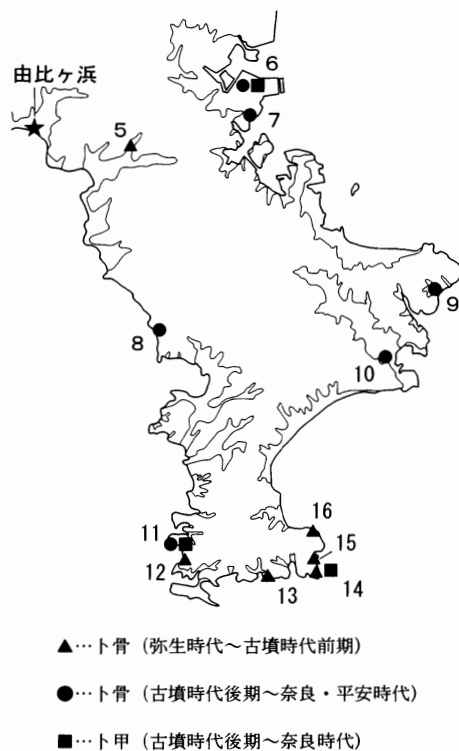
（１）弥生時代～古墳時代前期

海蝕洞窟（地点12～16）では、洞窟内貝塚から貝殻・魚骨といった食物残滓や多種の漁具とともにト骨が出土する事例が多く、採貝・漁撈従事者の習俗としてト占が行われたであろうとする、従前見解の根拠となっている。時代的には弥生時代後期前半・久ヶ原式期が中心となるが、層序の上では中期後半・宮ノ台式期にまで遡る可能性も含んでいる。三浦市赤坂遺跡に代表される、台地上での集落形成が活発化するのと時期を同じくするだけに、洞窟—台地間における遺跡形成の連動性、また両所に生活・生産の場を求めた集団間の接点といった事柄を考える上でも興味深い動態といえる。ト骨にはシカやイノシシの肩胛骨・肋骨を用いたものの他、イルカ椎骨を使用した例もある。

骨材への加工は研磨程度の簡単なもので、焼灼方式は第Ⅱ形式に属する。

逗子市池子遺跡群（地点5）では、No.1-A地点で谷戸部を流れる宮ノ台式期の旧河道が検出し、この埋土中からト骨7点が発見されている。河道跡は弥生後期まで流路としての機能を果たしていたようであるが、層位・伴出土器の面から、ト骨が中期後半の所産となることに誤りはないだろう。海蝕洞窟の資料では層位上の不安要素を抱えていた中期ト骨の存在を確実なものとした点で、本例は大きな意義を持つ。該期河道跡からは他に、多種の農具を主体とする豊富な木製品が発見されて注目を集めたが、この中に混じって釣り針・モリ・ヤスなどの骨角製品を中心とする漁撈具も出土している。出土したト骨は全てシカ・イノシシの肩胛骨を使用したもので、洞窟資料や後述する埋没谷の出土資料とは組成面で差異が認められる。骨材へは研磨程度の簡便な加工を施すのみで、焼灼は第Ⅱ形式を取っている。

池子遺跡群では、No.1-A東地点とNo.4地点においてもト骨が発見されている。いずれも弥生後期末～古墳前期に位置付けられる資料で、シカ・イノシシの肩胛骨の他、寛骨・肋骨を使用した例も見られる。焼灼はやはり第Ⅱ形式に類別されるものであるが、No-A東地点の肩胛骨使用例は肩胛棘を切除した後に焼灼を施しており、この点で宮ノ台式期資料との相違が認められる。当遺跡群において時代・形態の異なるト骨が複数発見されたことは、三浦半島における骨トが弥生・古墳時代の一期間を通じて伝統を保持したことの証左となり、一方で、こうし



第6図 三浦半島のト骨・ト甲出土遺跡

第2表 三浦半島のト骨・ト甲出土遺跡一覧

市	地点 番号	遺跡名	地 点	時代・時期※1	立地	出土位置	数量※2	
							ト骨	ト甲
逗子市	5	池 子	No.1-A	弥生中期	谷戸	旧河道	7	
			No.1-A 東	弥生末～古墳前期		埋没谷	15	
			No.4	弥生末～古墳前期		溝址（流路）	3	
横須賀市	6	鉞 切	C・D・E	古墳後期～平安？	砂丘	遺物包含層	(1)	4？
	7	日 向		古墳後期～平安？	谷戸	遺物包含層	1？	
	8	芦 名 浜		平安	砂丘	遺物包含層	41	
	9	小 荷 谷		平安	谷戸	井戸址掘り方	1	
	10	蓼 原		古墳末～奈良	砂丘	貝塚・竈	10	
三浦市	11	浜 諸 磯	C・E	奈良	砂丘	住居址覆土	14	2
	12	海 外		弥生後期	洞窟	貝層	30	
	13	毘 沙 門	B・C 洞窟	弥生後期	洞窟	貝層・混貝層	5	
	14	間 口	A 洞窟	弥生中期・後期	洞窟	貝層	18	
				古墳後期	洞窟	墓壇覆土？		3
	15	大 浦 山		弥生中・後期～古墳前期	洞窟	灰層・混貝砂層	7	
	16	雨 崎		弥生後期～古墳前期	洞窟	貝層	4	

※1 時代・時期については、ト骨・ト甲に関わる部分のみを表示した

※2 未報告遺跡の資料数については、神澤・中村両氏の集成に拠った

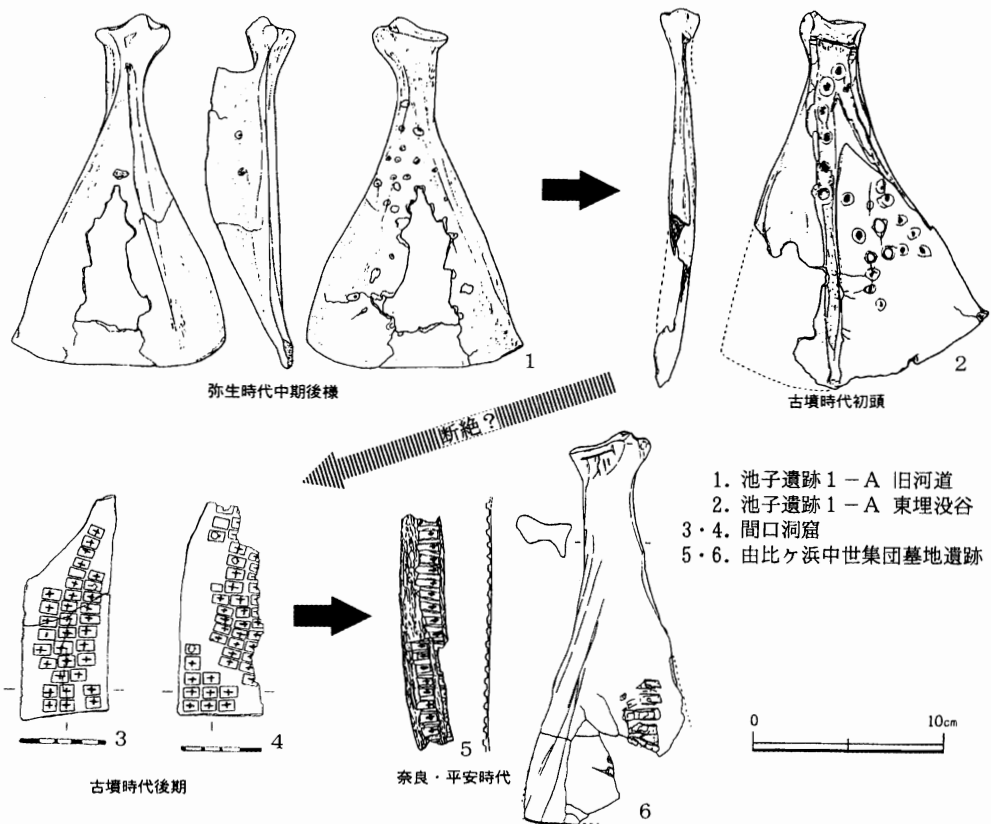
た伝統性が次代に繋がる可能性を示した点でも重要な意味を有している。

（2）古墳時代後期～奈良・平安時代

三浦市間口洞窟遺跡（地点14）では、古墳後期の墓壇からト甲が出土している。出土位置が上下に重複する墓址の中間位にあったため、副葬品としての性格を持つものか定かでないが、墓域的である該期洞窟空間のあり方から、何らかの葬送観念を有していた蓋然性は指摘できるだろう。本例はト甲出土例としては全国でも初めてで、この発見によって我が国における甲ト（亀ト）の風習が古墳後期までには成立し、かつ三浦半島にまで伝播していたことが考古学的に実証された。当該期のト甲は鉞切遺跡（地点6）でも出土している。祭祀遺構として名高い7世紀初頭の牛頭・土師器埋納遺構と同一層での発見で、同遺跡で認められている多様な祭祀の一形態として注目されるものである。また同層中からは、肩胛棘を一部切削したシカ肩胛骨も出土しており、報告ではト骨としての可能性が示されている。ちなみに、鉞切遺跡は平潟湾頭の旧汀線に程近い立地条件にあり、上記埋納遺構のレベルは海拔1.8mを測る。

奈良時代から平安時代にかけては、海浜部の集落遺跡がト骨出土地の主体的な存在となる。浜諸磯遺跡は独立丘と海蝕崖とに挟まれた幅70m程の砂堆上に立地し、現況海拔は4～5m、海岸線と非常に近接した遺跡である。これまでの調査では住居址が9軒の他、カツオ解体後の廃棄址とみられる土坑などが検出し、結合式釣り針の柄や「類製塩土器」と報告された土師器短頸甕（三浦型甕）などの遺物が多く出土している。こうした調査成果から、7世紀後半から9世紀代にかけて営まれた、漁撈專業集団の居住・作業空間といった性格付けがされている。C・E地点の合計でト骨14点、ト甲2点が発見され、C地点では8世紀初頭の住居址覆土に、E地点においては8世紀中葉～9世紀前半の包含層（ゴミ捨て場？）に伴うものであった

この時期には、一地点におけるト骨出土点数の多い遺跡が目立つようになる。先述の如く、ト骨自体が細かく破損しているため実質的個体数の把握は難しいが、由比ヶ浜や浜諸磯の他、



第7図 鎌倉・三浦半島におけるト骨・ト甲の変遷

工事中の発見ながら横須賀市芦名浜遺跡（染屋砂丘遺跡・地点10）でもイルカ肋骨を使用した平安時代のト骨41点が出土しており、特定の集落におけるト占行為が頻繁、或いはト骨を多用する形態であったことを窺わせる。

5. 出土遺跡の様相と特質—漁撈・ト占に見る伝統性—

ここでは、ト骨を検出した遺跡の様相・特質について、幾つかの例証を示しながら具体的に見ていくことにする。本論の主題からは時代が遡るが、弥生時代から始めることにしたい。

（1）弥生時代の漁撈活動とト骨

海蝕洞窟については、遺跡の立地性や出土遺物の特徴を見れば、漁撈を主生業とする人々の居住、或いは漁期に際してのベースキャンプといった性格を与えることに異論はないだろう。問題となるのは、彼らが台地上、或いは内地側の集落とどのような接点を持っていたかという点であり、この問題を検討することは該期社会のより具体的な姿に迫るだけでなく、三浦半島という小地域におけるト骨の性格的位置付けを行う上でも有効かと思われる。この解明に一步

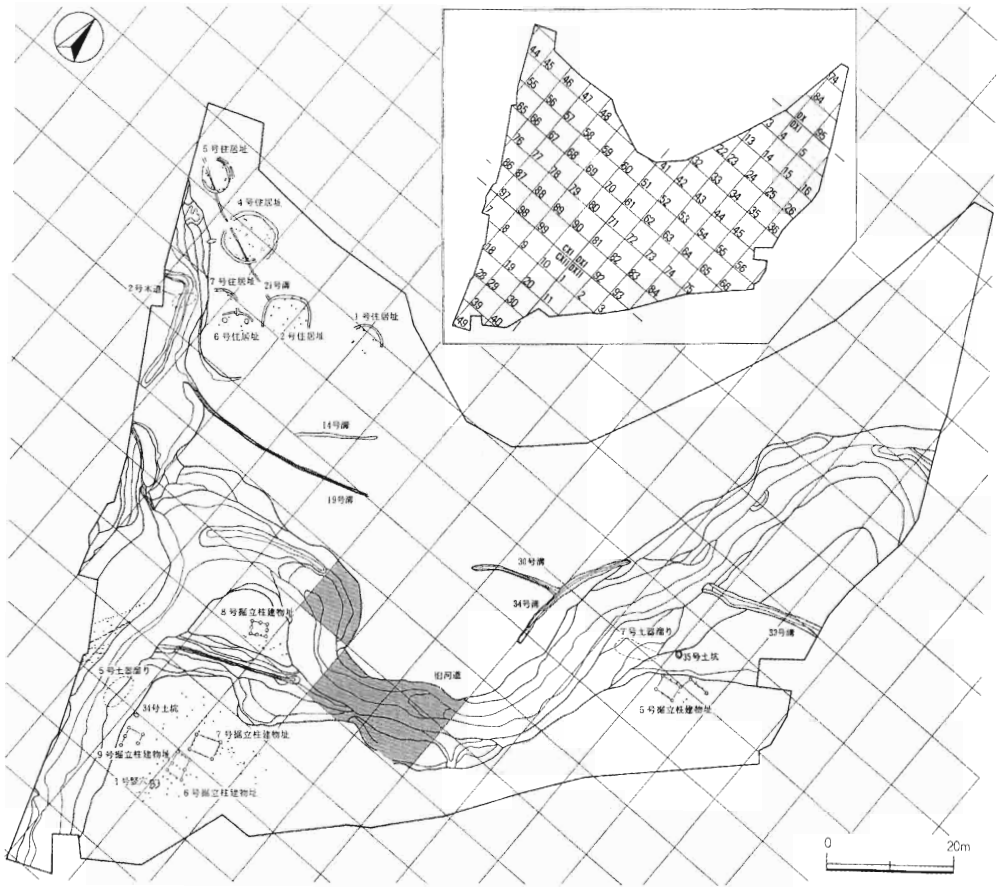
近付くべき視点として、前節で紹介した池子遺跡群の宮ノ台式期旧河道の存在を挙げることができる。ここからは多種の遺物に混在して骨角製を主体とする漁具の出土も一定量あったことは既に述べたが、これら漁具の属性に関連しては、やはり旧河道検出の魚類遺体の分析を通じ、漁獲対象種・漁法の実態という視点から検討を行った樋泉岳二氏の論考がある（樋泉1999）。そこでは、外洋性中・表層魚であるサメ類・カツオの個体数が他の魚種に卓越して多いという分析結果が示され、これが出土した釣り針や刺突漁具の機能・組成と矛盾を持たない点から、これらの魚が池子に暮らした人々の手によって直接捕獲されたのではないかとする見解が示された。その上で、当地の漁撈活動がカツオに強い選択性を持っていた点に注意が払われ、その盛漁期が水田稲作における農繁期と重複する問題、またカツオに限らず対象魚の大きさ・性質に適合した各種漁具の出土から、集落内には水田経営を主な生業とする集団とは別に、極めて高度な漁撈の知識・技術体系を持った集団も存在していた蓋然性が高いとする意見も呈された。⁽¹⁰⁾

一方で、河道におけるト骨の分布がカツオ遺体のそれとほぼ合致する点は、留意すべき状況といえる（第8図）。カツオ遺体については、カタクチイワシ・サバ属とともに「一部の集団のみで消費されたか、骨の除去後に集落全域へ分配された可能性が考えられ」ているが（傍点筆者）、その場合、カツオの漁獲・加工を行う集団・空間と、骨トを行う集団・空間との接点が想定可能ではないだろうか。ただし、これらが分布する箇所は流路が大きく蛇行する曲折点に当たり、木製品などもこの周辺で非常に集中して出土したというから、一種吹き溜まり的な様相も考慮に入れなければならない。その点を加味しても、サメ類その他の分布状況と比較して、やはり特異な出方として認識することは可能であろう。恣意的な理解であることは承知の上、次項の「^{つの}角釣り針」と結び付く事象とも考え、参考として取り上げた。

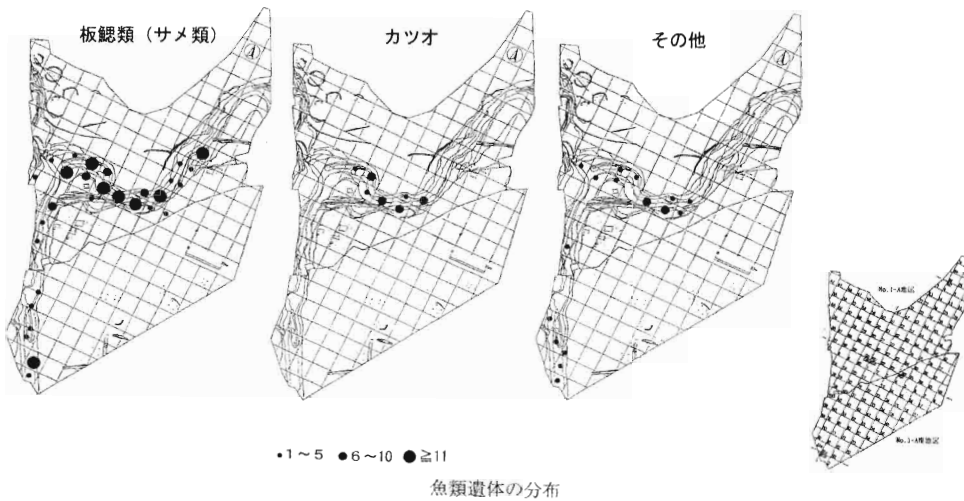
（2）「^{つの}角釣り針」とト骨

中村勉氏は、三浦半島の海辺遺跡において検出する結合式釣り針について、現行のカツオ釣り漁に用いられる擬餌針（^{つの}角釣り針）との関わりから文献例を含めた検討を行い、併せて製作技法・形態・法量による分類を試みている。そこでは、出土した角釣り針の諸属性と民具・現用資料のそれが相似する点、また先に触れた浜諸磯遺跡では多量のカツオ遺体とともに12点⁽¹¹⁾の類例が検出している点が考慮され、やはり出土資料にもカツオを主対象とした擬餌針としての機能が付与されている（中村1993）。浜諸磯で検出したカツオ遺体には、片側の側面にのみ切裁痕を残す椎体が多く見られ、また鰓部を集中的に検出した廃棄土坑も発見されたことから、同遺跡においてカツオの捕獲から解体・製品加工に至る一連の工程が集約的に行われた蓋然性が高まっている。角釣り針とカツオとの有機的関連を窺う上で、重要な事例といえるだろう。

出土遺跡の分布に目を向けてみると、ト骨同様、やはり海岸近くに偏った状況が確認できる（第9図）。遺物の用途を考えれば当然のあり方といえるが、集落遺跡から出土する以外に、横穴墓や洞窟内埋葬に伴う副葬品として使用された例も少なくない。大浦山洞窟では弥生後期～古墳前期の層準より出土しており、当地域では最古例となるが、総体的には古墳後期以降に

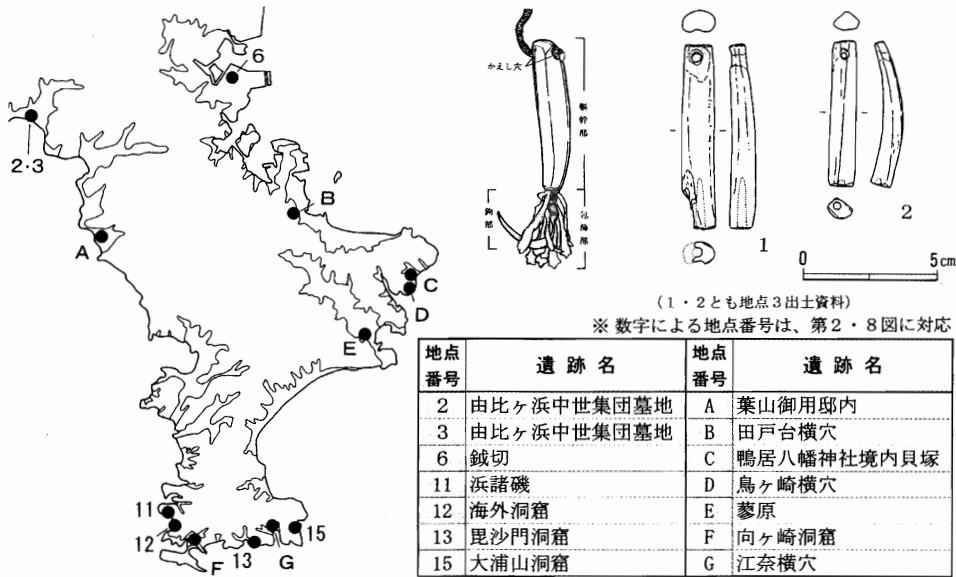


ト骨出土分布 (No. 1-A地点)



魚類遺体の分布

第8図 池子遺跡群・弥生時代旧河道におけるト骨・魚類遺体の分布
(山本・谷口1999、樋泉1999を改変)



第9図 「角釣り針」と分布（中村1993、渡辺2000をもとに作成）

なって急速に分布範囲が広がるようであり、大浦山の時期にあつて角を持つ釣り針が三浦半島全域に通有の漁具であつたのか、今の時点では明らかにし得ない。集落遺跡では住居址や貝塚（状遺構）、遺物包含層などから検出し、特に偏った出土傾向は窺えないようである。ただし、数量的には遺跡による多寡が看取され、由比ヶ浜の地点2・3では合計15点が出土するなど⁽¹²⁾、浜諸磯とともに突出した数値を示している⁽¹³⁾。

由比ヶ浜での出土状況を具さに見ていくと、地点2では住居址覆土・炭層・包含層から出土しており、8世紀前半～中葉にまとまった傾向が見て取れる。地点3でも出土遺構は同様であるが、こちらは8世紀代～9世紀中葉と時期的にやや幅を有しており、この点では第1表に見たト骨の消長と同じ傾向が窺える。ちなみに、両地点で角釣り針を検出した遺構・層位の11例中10例においてト骨の出土も確認されており、厳密な意味での供伴関係は認め得ないまでも、大よその共時性を示す状況証拠となることはいえるだろう。

残念ながら、由比ヶ浜の報文では魚類遺体についての詳細な分析がなされてなく、浜諸磯のように集落における漁獲→加工→流通（消費）といった一連の動きを体系的に把握することはできなかった。よって現時点では限られた事例からの類推に頼るしかないが、由比ヶ浜および浜諸磯をはじめとする三浦半島の古代海浜部遺跡は、立地条件に加えてト骨と角釣り針という、精神面・生業面における共通の文化的要素を有していたことが想定される。そして、こうした側面の背景には、弥生時代以来の漁撈民と骨トとの伝統的関係があつたことを、可能性として指摘しておきたい。弥生・律令の両時代を線的に、かつ実証性を以って結び付けることは今の時点では不可能である。ただ、一地域における文化の基層性という問題を視野に入れた場合、あながち無視できない視点であるように思う。

6. おわりに―ト骨をめぐる諸問題―

古代の鎌倉からはやや乖離した論点を示してきたが、ここで鎌倉に話を戻し、ト骨をめぐる二、三の問題に触れてまとめとしたい。

(1) 分布傾向・遺存条件

ト骨分布の特性に関連して先ず前提とすべき点に、遺存条件の問題が挙げられる。これまでに見てきたような分布を示す一因として、出土遺跡が貝塚（貝層）の存在や土壌の成分など、骨材遺存の上で好適な条件を備えていたことが指摘できる。台地上の遺跡ではよほどの好条件が整わない限り有機質遺物の残存は難しく、実際のところ、ここでのト骨出土は皆無である。内地寄りの遺跡としては池子遺跡群が唯一となるが、ここでは河川跡・埋没谷という保水性に優れた立地条件にあったことが幸いしている。従って、現時点での分布のあり方が本来の姿を表すものであるのか、谷戸をはじめとした今後の調査成果を注意深く見ながら考えていく必要があるだろう。

鎌倉に目を転じると、例えば郡衙跡が検出した今小路西遺跡やその周辺域では、中世の多様な木製品・骨角器の出土が示すように地下水位が高く、有機質遺物の遺存条件は比較的整っているように思えるが、現時点におけるト骨の出土例はない。近年の調査では、砂丘域北側に展開する低湿地において古代の遺構・遺物が検出することも稀ではなく、このような中でのト骨の海浜部への集中は、本来的な分布傾向を概ねで示していると捉えることもできよう。ただし、こうした地域では砂丘域ほどまとまった集落址の発見は未だないことから、安直に対比を行える状況にないことは付言しておく。

本論では、少なくとも鎌倉において遺存条件の適否を理由とする分布傾向の誤差はないものと考え、その認識の下に海浜部集落という遺跡の立地・性格との関連からト骨に関する考察を行ってきた。聊か性急な理解であることは自覚しているが、こうした分布のあり方が今後どのような進展、或いは変化を見せるのか、新たな類例の発見に注目したい。

(2) ト骨の伝統と変遷について

ここまで、鎌倉・三浦半島のト骨が弥生時代中期以来、その形態を変化させつつ一定期間の伝統を保持していたことを確認した。変化の過程については、神澤氏が提唱した形式分類・変遷に準じたあり方を示し、全国的な流れとも齟齬のないものである。このことは、当地域の骨ト習俗が一地域のみの伝統として受け継がれたものでなく、他の地方・地域との交流を重ねながら段階的に変容・伝承されたことを物語っている。間口や鉾切における方形鑽を持つト甲の出現は、遠く対馬・壱岐での新たなト占方法の出現・展開からの波及と考えることができ、その後のト骨が総じてト甲に準じた第Ⅴ形式に移行する点を考えれば、骨ト伝統の上で大きな画期と評価することはできよう。しかし、その前提には前代におけるト占形態の複次的波及・受容という素地があったことも無視できない。一方で、当地域では古墳中期の類例が全く欠落

していることが大きな問題として横たわり、該期において遺跡数総体が極端に減少することを考量しても、現時点では伝統の一時断絶という視点も含めた理解が必要であるかもしれない。

（３）海浜部集落の成立とト骨

由比ヶ浜では８世紀前葉から既にト骨の存在が認められ、一部は７世紀後葉に遡る可能性を有している。おそらくは集落の開始当初より骨トを行う集団が存在していたと考えられるが、それでは、彼らは何処に出自を持ち、どのような経緯で海浜部に移り住んだのであろうか。

律令期前代の鎌倉中心域における集落様相については、実態不明というのが正直なところである。しかし、由比ヶ浜に集落が形成される直前段階には砂丘域の背後に展開する丘陵斜面に複数の横穴墓群が営まれ、間接的ながら周辺での集落の存在を示している。これらの横穴墓群は５・６基程度の小規模なまとまりを持ち、この造営に関与した数単位の集団が、丘陵裾部や谷戸内に居住・生産の拠点を置いていたことが想定される。このような在地の小規模集団が、７世紀後葉段階になって由比ヶ浜へ進出・集住したと見るのが自然かと思われる。

ただし、ここで注意しなくてはならないのが、郡衙などの整備に関わる拠点として由比ヶ浜の集落形成が行われたとする、先記菊川氏の見解である。第２図に目を戻すと、郡衙・寺院・古東海道といった諸施設と由比ヶ浜の集落が近接した位置関係にあることが分かるが、海浜・ラグーン（註２参照）を控えた由比ヶ浜には港津としての機能も想定され、これらの遺跡群が相互・有機的に結び付いて古代の鎌倉が形作られたとする理解である。近年の研究では、こうした見方が諸視点から検証されつつあり筆者も賛同するものであるが、その場合、拠点となるべき集落の形成には、律令政府の関与があったと見るのが妥当かと考える。無論、これは地域拠点にのみ限定された話ではなく、当該期には原則として全ての集落・集団（人民）について国家的統制に基づいた掌握、若しくは再編が進められた動きの一環に過ぎず、それが端的に表れた一事象が由比ヶ浜の集落形成ということがいえるだろう。諸施設の整備と人民の掌握・再編という、律令制施行に伴う二つの動態がここに見出されることは非常に興味深く、こうした中に、先に想定した在地小規模集団（群）が取り込まれていったものと推察される。

田尾誠敏氏は、古代における鎌倉と三浦半島に見る遺物様相の近似性から、由比ヶ浜を中心とする律令期鎌倉の開発が三浦半島側から進められた可能性を示唆しているが（田尾2002）、ト骨や角釣り針など、三浦地域における基層的文化要素がここに至って顕現化する点も、こうした論点を補強しうる現象として注目される。開発の方向という氏の指摘には、郡（評）域を超えた人の移動・再編があったのかなど、史料検討も含めた考証を必要とするため即座に答えを見出せないが、先記の在地小集団の中にも、三浦半島との関わりの中で漁撈専従・骨ト習俗を受け継ぐ者達があったと仮定しても不自然ではないだろう。集権的国家の介在下に成立した地域の拠点集落と在地集団、そして伝統習俗としての骨ト、こうした一見異質ともいえる側面を由比ヶ浜のト骨は語っているように思える。

その一方で、浜諸磯の集落は由比ヶ浜とはまた違った国家的要求の中で成立した集落である

ことがいえる。中村氏は、カツオ・アワビといった『延喜式』に見える中央への貢納物の進貢が8世紀代に遡って行われていた蓋然性を認め、浜諸磯はまさにこの採捕・加工を目的とした専業集団の集落であったと位置付けている。このように、一口に海浜部集落といっても、その需要されるところによって景観や性格は多様であり、そこに目を凝らせば、何らかの形で国家と在地集団との接点が見出せるのである。

換言すれば、国家の側は在地集団の持つ伝統的生業体系・技術を十分に把握した上で支配・収税機構を構築していったということであり、そこに組み入れられた人々もまた、自らの精神世界を変わずに保持していったことが窺えるのではないだろうか。

論点が多岐に及んだものの、そのいずれにも必要な分析を施せず、多くの課題を残す結果となった。自らの論理性のなさを恥じるばかりだが、今後も折に触れ、僅かずつでも古代の鎌倉・三浦半島とト骨に関わる諸事の解明に近づくべく、検討を続けていきたい。

なお、本論は横須賀考古学会・古代研究部会および相模の古代を考える会における二度の発表内容をもとに構成したものである。稚拙な報告に対し貴重なご意見を頂いた両会々員の方々にはこの場を借りてお礼申し上げます。また中三川昇・中村勉の両氏には資料収集および研究の方向性の上で多くのご教示を頂いた。末筆ながら、心より感謝申し上げます。

(2003年12月30日脱稿)

註

- (1) 1971年から1973年にかけて、県立博物館（現・県立歴史博物館）の学術事業として実施されたもの。同地点では、1949年にも赤星直忠氏の主導による調査が実施されており、この時にはシカ肩胛骨などを用いたト骨が発見されている。現地調査でト骨として認定された資料としては、同例が国内で初出となる（赤星1953）。
- (2) 中村勉氏は後に、鑽の有無の違いから第一群・第二群形式を設定し、それぞれ神澤氏の「一致型」と「分離型」に対照させている（中村1996）。
- (3) 今のところ伊豆半島でのト骨・ト甲の出土は報告されていないが、中村氏は『延喜式』に見られる亀ト長上者に関する記述、また伊豆半島・伊豆諸島に残る文献上の記載から、古代の伊豆においても亀トが伝統的に行われていた可能性を示唆している。
- (4) 前稿では他に、地点1の南東近接地から出土した資料もト骨の可能性のあるものとして掲げたが、中世遺構からの出土であるという点、また形態的にも古代のト骨とは様相を異にするとした、報告者である馬淵和雄氏の所見に従い、本稿では対象外とした。
- (5) 第2図では示していないが、ト骨が出土した各地点は旧汀線と滑川河口に広がる潟湖（ラグーン）に接する位置にあったと考えられている（菊川1997：図2参照）。ちなみに、東海道については現時点での研究成果をもとにした推定ラインで、木下他1997の想定図・記述に準拠したものである。
- (6) 今回は報告書における遺構年代観に従ってト骨の年代も捉えたが、地点2・3に見られる時期差をどのように解釈すべきか、解答を得ていない。貝塚状遺構など、新旧の遺物が混在する要素が強い中での出土が多いことから、上記問題の解決を見るためにも、今後はト骨の使用年代を絞り込む作業が

必要となってくるだろう。

- (7) 弥生時代のト骨の中には、明らかに人為的破碎を受けたものが多いという。この点について神澤氏は、神意を汲み取る媒体としてのト骨が、ト占終了後には神性を払拭するため故意に破碎された結果であろうと述べている（神澤1990）。
- (8) 本文中でも述べたように、由比ヶ浜では貝塚状遺構や包含層から出土する例が殆どで、ここに新旧混在した土器様相が認められることはいうまでもない。彫鏤の精粗が時期差を示すものなのか、単に個体差として片付くものなのかは、今後の資料増ごとに検討していくべき課題といえる。
- (9) この点は神澤氏も指摘しており、第Ⅴ形式とは類別して第Ⅵ形式を新たに設定することにも視野を広げた所見を示している（神澤1990）。いずれにせよ、古墳後期の資料増加が待たれるところである。
- (10) ただし、こうしたカツオ・サメ類への強い選択性については、洞窟利用者とといった外部漁撈民との選択的な交易の結果とする解釈も成り立つことを樋泉氏は述べており、様々な可能性を残しながら、今後の総合的な検討が必要であろうとの考えを示している。
- (11) 論考が発表された時点では、C地点で出土した6点が報告されている。その後、E地点の調査でも6点の資料が追加されている（地点11文献）。
- (12) 本文に記した他に、中世の類例として地点2と同一遺跡の由比ヶ浜4-6-9地点において各2点、若宮大路周辺遺跡群では古代河川への混入遺物として1点が出土している（脱稿後、鎌倉・三浦半島における中世漁撈具を主題とした宗基秀明氏の論考に接し、鎌倉市内では他に2地点で各1点の中世事例が出土していることを知った（宗基2003））。鎌倉市以外では、横須賀市蓼原東遺跡で中世前期～後期（13世紀前半～15世紀代）の類品4点が発見されている。
- (13) 由比ヶ浜と浜諸磯とは調査実施面積が大きく異なるため、出土数による単純な比較はできない。単位面積に対する出土点数の比率を見ると、由比ヶ浜では $0.006/\text{m}^2$ （地点2・3の合計）、浜諸磯では $0.035/\text{m}^2$ （C・E地点合計）という数値を示し、浜諸磯がカツオの捕獲に如何に重きを置いた集落であったか、この数字をもっても窺い知ることができよう。

ト骨・ト甲の出土に関する報告書・文献（番号は本文中の地点番号に同じ）

- 1 大河内 勉 1997 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書（由比ヶ浜三丁目194番40地点）』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 2 大河内 勉・菊川英政他 1997 『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書（由比ヶ浜四丁目1136番地点）』 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
- 3 大河内 勉 1996 『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書（鎌倉市由比ヶ浜四丁目1134番地点）（第1分冊・古代編）』 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
- 4 原 廣志・佐藤仁彦他 1993 「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（No.372）（由比ヶ浜二丁目1034番1外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9（第1分冊）』 鎌倉市教育委員会
- 5 長谷川厚他 1999 『池子遺跡群Ⅶ No.3・4・11地点』 財団法人かながわ考古学財団
山本暉久・谷口 肇 1999 『池子遺跡群Ⅸ No.1-A東地点・No.1-A南地点』 財団法人かながわ考古学財団
山本暉久・谷口 肇 1999 『池子遺跡群Ⅹ No.1-A地点』 財団法人かながわ考古学財団
- 6 小出義治他 1986 『鉞切遺跡（C・D地点）』 横須賀市教育委員会
川瀬智晴 1992 『鉞切遺跡E地点』『埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』 横須賀市教育委員会
- 7 川瀬智晴 1992 『日向遺跡』『埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』 横須賀市教育委員会
- 8 赤星直忠他 1979 「横須賀市染屋砂丘遺跡」『神奈川県史』資料編20 神奈川県

- 9 中三川 昇 1994 『小荷谷遺跡』 横須賀市教育委員会
- 10 大塚真弘他 1987 『蓼原』 横須賀市教育委員会
- 11 岡本 勇・中村 勉他 1991 『浜諸磯遺跡（C地点）』 浜諸磯遺跡発掘調査団
中村 勉他 1998 『浜諸磯遺跡（E地点）』 浜諸磯遺跡発掘調査団
- 12 海外洞穴調査団 1991 「三浦市海外洞穴遺跡調査の概要」『横須賀考古学会年報No26』 横須賀考古学会
- 13 赤星直忠 1953 「海蝕洞窟—三浦半島に於ける弥生式遺跡—」『神奈川県文化財調査報告』第20集
神奈川県教育委員会
- 14 同上文献
神澤勇一 1972～1975 『間口洞窟遺跡（1）～（3）』 神奈川県立博物館
- 15 赤星直忠他 1997 『大浦山洞穴』 三浦市教育委員会
- 16 赤星直忠他 1984 『三浦半島海蝕洞穴遺跡』 横須賀考古学会

引用・参考文献

- 大河内 勉 1990 「鎌倉市由比ヶ浜中世集団墓地遺跡出土の『神主』銘古代墨書土器について」『東国史論』 群馬考古学研究会
- 押木弘己 2004 「研究ノート 鎌倉出土の古代のト骨について—三浦半島との関連を中心に—」『鎌倉考古』No49 鎌倉考古学研究所
- 神澤勇一 1976 「弥生時代・古墳時代および奈良時代のト骨・ト甲について」『駿台史学』第38号 駿台史学会
- 神澤勇一 1983 「日本における骨ト、甲トに関する二三の考察—先史古代のト骨・ト甲と近世以降の諸例との比較検討を中心に—」『神奈川県立博物館研究報告』第11号 神奈川県立博物館
- 神澤勇一 1987 「日本のト骨」『月刊考古学ジャーナル』No281 ニューサイエンス社
- 神澤勇一 1990 「呪術の世界—骨トのまつり」『弥生人とまつり』 六興出版
- 菊川英政 1996 「古代鎌倉の様相—奈良・平安時代における鎌倉郷中心域の変化—」『考古論叢神奈河』第6集 神奈川県考古学会
- 木下 良他 1997 『神奈川の古代道』 藤沢市教育委員会 博物館建設準備担当
- 宗墓秀明 2003 「中世の鎌倉と三浦半島周辺の漁撈具」『物質文化』第76号 物質文化研究
- 田尾誠敏 2002 「古代の遺物」『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書—第85地点—』 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 田村良照 1998 「古代（7～8世紀）鎌倉郡の様相」『湘南考古学同好会々報』73 湘南考古学同好会
- 田村良照 1999 「続・古代鎌倉郡の様相」『湘南考古学同好会々報』75 湘南考古学同好会
- 中三川 昇 2000 「奈良・平安時代の三浦半島—土器様相の特色を中心として—」『三浦半島の文化』第10号 三浦半島の文化を考える会
- 中村 勉 1993 「『角』とよばれる釣針について—三浦半島出土の資料を中心として—」『考古学研究』158 考古学研究会
- 中村 勉 1996 「三浦半島の弥生時代のト骨について」『横須賀考古学会年報』No31 横須賀考古学会
- 中村 勉 2002 「三浦半島におけるト骨・ト甲研究の現状」『月刊考古学ジャーナル』No492 ニューサイエンス社
- 樋泉岳二 1999 「池子遺跡群No1-A地点における魚類遺体と弥生時代の漁撈活動」『池子遺跡群X No1-A地点』 財団法人かながわ考古学財団
- 渡辺 誠 2000 『考古ソフテックス写真集』第15集 名古屋大学文学部考古学研究室